

感覚過敏とその支援に関する大学生の認識に関する調査

町田 唯香*・橋本 創一**・李 受眞***・渡邊 真帆*・田中 里実***・歌代 萌子****

(2020年11月25日受理)

MACHIDA, Y., HASHIMOTO, S., LEE, S., WATANABE, M., TANAKA, S. and UTASHIRO, M; Survey on College Students' Perception of Hypersensitivity and Support for These Students ISSN 1349-9580

Traditionally, sensory problems in children and people with autism have been regarded as necessary. Today, sensory problems are receiving even more attention because they have been included in the diagnostic criteria for people with autism. Hyperesthesia in autistic people can be reduced by supporting them appropriately from an early stage. This study conducted a survey of university students for supporting people with hyperesthesia during school age and later. A questionnaire survey was conducted with 282 participants, and the data of 274 participants were analyzed after excluding non-responders. Of these, 98 respondents (36%) were currently suffering from some types of hyperesthesia or an unbalanced diet, indicating that a certain number of people have hyperesthesia after school age. We analyzed the type of support these people wanted in their elementary schools and the types of interactions they currently want with their friends by using the KJ method. The results indicated that many participants wanted "a reduction in stimuli." Therefore, it is necessary to support such people so that they do not experience too many stimuli or increase their resistance to sensitivity. Moreover, adults near school-aged children need to proactively approach these children because they cannot express their hypersensitivity or the type of support they require appropriately. Adults must consider differences between desirable support and interactions and characteristics of support for hyperesthesia that is necessary for university students.

KEY WORDS : Hypersensitivity, College student, Support in school age

* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*

*** *The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University*

**** *Kawasaki City Central Rehabilitation Center*

1. はじめに

2013年にDSM-5が制定されたことにより、「自閉性障害」「アスペルガー障害」「特定不能の広汎性発達障害」「小児期崩壊性障害」が自閉症スペクトラムという一つの

診断基準にまとめられた。そして、同時に診断基準に興味・行動の問題として感覚の異常が加わった。この感覚の異常は、従来からその困難さへの対処において重要と考えられていたが、診断基準に加わったことにより更に注目が集まっている。本研究では、この感覚の異常な

* 東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター

*** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

**** 川崎市中央療育センター

かでも感覚過敏に注目している。

Bromley (2004)¹⁾ は、自閉症児71%に音に関する過敏、54%に接触に関する過敏が見られたことを指摘している。これは、自閉症のある者の感覚の異常が、その対処において重要であることを示していると考えられる。感覚過敏とは、特定の感覚刺激に対して苦痛を感じたり、過度に否定的な反応を示し、そのような感覚刺激をしばしば回避したり、過度に警戒したりすることである(高橋ら, 2008)²⁾。カメラのフラッシュなど強い光を極端に嫌がるといった視覚過敏や、体に触られることに非常に敏感であるといった触覚過敏などが挙げられる。川崎ら(2003)³⁾ は、広汎性発達障害児は健常児に比して全般的に感覚偏倚が多く、触覚・聴覚は「快」にせよ「不快」にせよ過敏が有意に多かったことを指摘している。しかし、この感覚過敏は、自閉症スペクトラム児に限られたことではない。前田ら(2011)⁴⁾ は、保育所において幼児が示す気になる行動の多くは、身体感覚の偏りを背景として説明できると述べていることから、発達障害の診断のない児にも感覚過敏があることが窺える。そして、感覚過敏は偏食とも大きく関係している。高橋ら(2008)²⁾ は、偏食の理由は様々であることを指摘しており、触感がダメという触覚過敏や色が気持ち悪くて食べられないという視覚過敏、揚げ物の匂いが嫌だという嗅覚の問題もその理由として挙げている。そのため本研究では、偏食についても感覚過敏の支援への視点として注目している。そして、こういった感覚過敏は、早期に対応することで、その過敏さを減少させられるという先行研究もある。これらのことから、就学前や小学校における感覚過敏への支援が大切であるといえる。また、松田ら(2019)⁵⁾ は、感覚プロフィール短縮版を用いてASD児者に特有の行動傾向がどのような感覚過敏・鈍麻と関連するのかという研究において、「こだわりと認知の偏り」が感覚過敏と関連することを明らかにしている。しかし、感覚過敏による困難を示すのは、発達障害のある者だけではない。例えば「雷の大きな音が怖い」といった過敏さのある友人が青年期以降にもいることが予想される。感覚過敏のみでは、就学や就労に大きな影響を及ぼすことはあまりないが、それでも日常生活を過ごすなかで困難さを感じることは多々あるだろう。そういった人への支援についても考えていくことが必要である。

本研究では、大学生を対象に調査を行っている。大学生の感覚過敏への支援の視点を調査することで、学童期やそれ以降の支援のあり方を考えることを目的として行った。

2. 方法

2. 1 調査期間

2020年6月に実施した。

2. 2 調査対象

A国立大学教育学部の1年生(282名)を対象とした。

2. 3 調査手続き

対象学生にword書式で作成した文書をインターネット上で配布し、回収した。

2. 4 質問紙の構成

質問紙の構成は以下の通りである。①現在、視覚過敏・聴覚過敏・触覚過敏・嗅覚過敏・味覚過敏または偏食があるかどうか。ある場合は、その強度がどれくらいか、またどのように対応しているのか②小学生の頃に望んでいた支援について③現在、友人に対してどのような関わり方を望んでいるか④現在、周囲に感覚過敏のある友人がいるか⑤もし、現在、周囲に感覚過敏のある友人がいたとしたらどのように関わるか

①は、太田(2010)を参考に、強度をない～とても強いまでの5件法で、対応を、回避している～我慢しているまでの4件法で回答するように求めた。②, ③, ⑤は自由記述で回答するように設問を設けた。また、質問紙の冒頭に感覚過敏についての説明を加え、回答者全員が、同一の感覚過敏に関する認識をするようにした。

2. 5 倫理的配慮

データを配布した際に、研究倫理を遵守し、得られたデータは統計的に処理し、個人が特定されることはないことを明記した。調査用紙への回答をもって調査ならびに研究結果の発表について同意が得られたものとした。そのうえで、個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。

3. 結果

3. 1 感覚過敏の有無について

回収率は100%となった。得られた回答のなかで、無記入のものを除いた274名を分析対象とした。現在、視覚過敏・聴覚過敏・触覚過敏・嗅覚過敏・味覚過敏または偏食があると回答した者は、98名と全体の36%を占める結果となった(図1)。弱い～とても強いと答えた人数が一番多かったのは、聴覚過敏である。その聴覚過敏の強度の内訳は図2の通りである。また、周囲に感覚過敏

のある人がいると回答したのは、全体の23%の62名だった。

現在の感覚過敏の有無

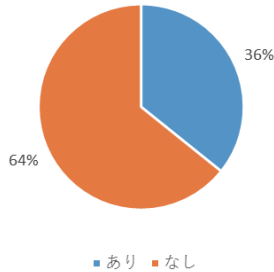


図1 感覚過敏の有無 (n=274)

聴覚過敏【強度】

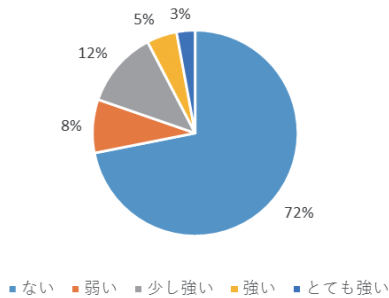


図2 聴覚過敏の強度 (n=274)

周囲に感覚過敏と思われる者がいるか

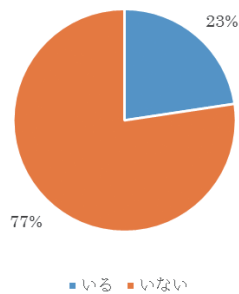


図3 周囲にいる感覚過敏と思われる人の有無 (n=274)

3. 2 小学生の頃に望んでいた支援

現在も何らかの感覚過敏があると回答した者に対し、小学生の頃にどのような支援を求めているか、自由記述で回答を求めた。文章数の合計は、109となっている。得られた回答を、大学教員1名と臨床心理学を専門とする大学院生2名によりKJ法で分析を行った。そのカテゴリーは以下の通りである。(1) 刺激の減少 (2) 刺激の変更 (3) 刺激の予告 (4) 過敏さへの理解 (5) 望んでいなかった (6) その他の6つのカテゴリーに分類することができた。その内訳は図4の通りである。刺激の減少や

刺激の変更など、過敏さが現れる刺激に対する配慮を望んでいたという回答が全体の約半数を占めている。また、「支援を望んでいなかった」という回答で構成されている(5)望んでいなかったというカテゴリーも約3割を占める結果となった。

小学生の頃に望んでいた支援

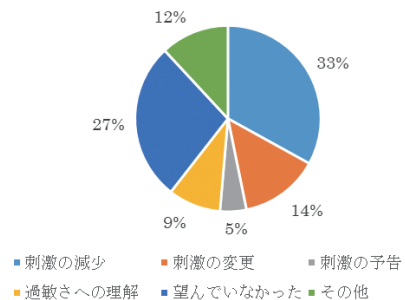


図4 小学生の頃に望んでいた支援 (n=109)

3. 3 現在、友人に望む関わり方

小学生の頃に望んでいた支援についてと同様に、現在友人にどのような関わり方を望んでいるか自由記述で回答を求め、KJ法により分析を行った。その結果、(1) 刺激の減少 (2) 普段通り (3) 過敏さへの理解 (4) 刺激の予告 (5) その他の5つのカテゴリーに分類することができた。内訳は図5の通りである。刺激の減少が4割以上を占める結果となった。また、小学生の頃望んでいた支援と同様、特に望んでいない、普段通りに接してほしいという回答で構成されている(2) 普段通りのカテゴリーも約2割を占めている。しかしその数は、小学生の頃に望んでいた支援の回答数よりも減少する結果となった。

現在望んでいる支援

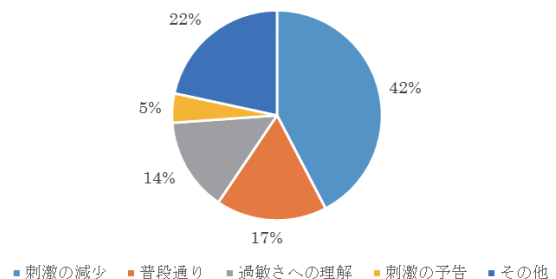


図5 現在、友人に求めている関わり方 (n=111)

3. 4 周囲の感覚過敏のある友人への接し方

もし、現在、周囲に感覚過敏のある友人がいたとしたらどのように関わるか、回答者全員に自由記述で回答を求めた。この自由記述は、フリーソフトKH coderを使用

して分析を行った(図6)。「本人」という言葉が多く抽出されている。これは、「まずは本人に話を聞く」「本人が嫌だと感じる刺激を減少させる」など、感覚過敏のある本人主体に関わっていくという回答である。そして本人の過敏を「理解」する、「知る」という回答も多く、それに関する語が抽出される結果となった。その他にも、刺激に関する具体的な対応の方法や本人の過敏さを知らない自分以外の周囲の友人に過敏さについて伝えるなど、他の友人との橋渡しをするというような関わり方も提案されていた(抽出語は、伝える、友人など)。

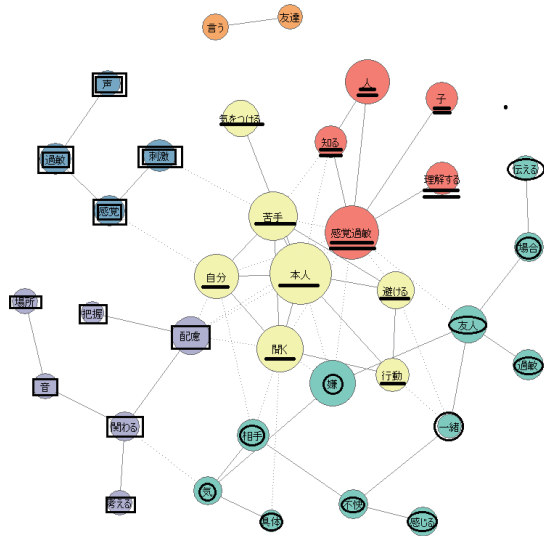


図6 周囲に過敏さがある者いた時の支援について (n=519)

4. 考察

全体の36%が、大学生の現在も何らかの感覚過敏または偏食があるという結果となった。その多さは聴覚過敏、次いで視覚過敏、嗅覚過敏となっている。数に差はあるが、どの過敏さについても30名以上が過敏さがあると回答しており、中には複数の過敏さがあると回答している者もいた。この結果から、学童期を過ぎたあとも、過敏さがなくなる者もいること、またその過敏さが複数にわたり複雑な場合もあることが示唆された。

小学生の頃に望んでいた支援は、KJ法により6つのカテゴリーに分類することができた。「刺激の減少」や「刺激の変更」など、刺激を調整することが多く望まれていた。過敏さのある刺激に過度に接触し、その拒否感が強くなるように支援をしていく必要がある。また、この刺激を調整するのは、教員や保護者など周囲の大人が行うことになるだろう。KJ法の結果にもある通り「過敏さへの理解」も望まれていた。刺激を対処するためにも、感覚過敏のある児童の過敏さを十分に理解し、対応でき

るようにしなければならないだろう。

現在望まれている友人の関わり方もKJ法により5つのカテゴリーに分類することができた。こちらも「刺激の減少」が多くを占めている。聴覚過敏であるなら大きな声を出さないで欲しい、嗅覚過敏であれば強い香水をしないで欲しいという回答が多く見られた。学童期を過ぎて感覚過敏のある人が、どのような過敏さを持ちどのような刺激への拒否反応が強いのかということを周囲が「理解」し、量などを調節できるような刺激は積極的に調整するのが良いだろう。

小学生の頃に望んでいた支援と現在望んでいる関わり方を比較してみると概ね同じカテゴリーとなっている。ここで注目したいのは、小学生の頃に望んでいた支援の「望んでいなかった」と現在望んでいる関わり方の「普段通り」というカテゴリーである。これは、特に支援は必要ない、普通に接してほしいという回答で構成されたカテゴリーである。割合を見てみると、「望んでいなかった」は27%、「普段通り」は17%とその割合が減少している。これは、感覚過敏のある者が自分自身の感覚過敏について認識が明確になったことと、支援を求める姿勢が変化したことによる違いだと考えることができる。まず、支援を要請するためには、自分自身の感覚過敏が何であるのか、どのような刺激が嫌なのかという認識を必要がある。日々の生活のなかでそういった過敏さに関する認識が深まったために、自分自身がどのような支援が必要なのかということの認識もできるようになったのだろう。また、現在、周囲に感覚過敏のある友人がいたとしたらどのように関わるかという回答をKH coderで分析した結果、感覚過敏のある本人主体の関わり方をするという回答の特徴が分かった。このことから、感覚過敏のある本人がどのような刺激に拒否感があるのか、どのような支援をしてほしいのかということをお伝えしなければならないことが分かる。しかし、小学生の頃は「周囲になんと思われよう」「変な目で見られるかもしれない」という心配から周囲になかなか支援を求めることができないのではないだろうか。大学生になると伝え方のスキルが上昇し、また情報を伝える相手を取捨選択できるようになることから、自分自身がどのような関わり方、支援をしてほしいのかということをお伝えやすくなると考えられる。そのため、学童期における感覚過敏の支援を考える際には、自分自身の感覚過敏に関して求める支援を要求できない、支援して欲しいと言えない児童に対して、周囲の大人が代弁する、表現するなど、その支援が実行されるように、教員やスクールカウンセラーなど周囲の大人からアプローチする必要があるだろう。

5. おわりに

本研究では、感覚過敏の支援に関する支援の認識を明らかにし、学童期やそれ以降の支援のあり方を考えるために、大学生を対象に調査を行った。学童期以降も感覚過敏のある者が一定数いることが明らかになった。また、求める支援、関わり方のKJ法カテゴリーの違いから、学童期における支援は、周囲の大人からのアプローチも必要であることが示唆された。そして、もし周囲に感覚過敏の者がいたら、まずは本人がどうして欲しいのか把握することから支援を始めると考えている大学生が多いことが分かった。

文献

- 1) Bromley J, Hare DJ, Davison K, et al (2004) Mothers supporting children with autistic spectrum disorders, social support, mental health status and satisfaction with services. *autism*, 8, 409-423
- 2) 高橋智, 増渕美穂 (2008) アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究: 本人へのニーズ調査から 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 59, 287-310
- 3) 川崎葉子, 三島卓穂 (2003) 広汎性発達障害における感覚知覚異常 発達障害研究25, 1, 31-38
- 4) 前田泰弘, 小笠原明子 (2011) 保育園における幼児の気になる行動と身体感覚の偏倚の関連性 東北福祉大学研究紀要35, 147-155
- 5) 松田恵子, 和田由美子, 一門恵子 (2019) 自閉スペクトラム症児者における感覚過敏・鈍麻の実態 (1) 心理・教育・福祉研究18, 49-55
- 6) 太田篤志 (2010) JSI-mini 日本感覚統合インベントリー開発プロジェクト, jsi-assessment.info/index.html